2022年7月17日（日）主日朝礼拝説教

『奪われた神の箱』　井上隆晶牧師
サムエル記上4章4〜11節、5章1〜7節

❶【神の箱が担ぎ出される】

今日は、「神の箱・契約の箱」にまつわるお話をしましょう。ここにはペリシテ人が出てきます。ペリシテ人はエーゲ海から移住した「海の人」たちで、地中海沿岸に国を造りました。「パレスチナ」という地名は「ペリシテ」に由来すると言われています。ペリシテ人たちは国境を越えて南下し、たびたびイスラエルの国を支配しようとしました。そこでイスラエルは、何度もペリシテ軍と闘うことになります。ダビデとゴリアトが戦った話など有名です。ペリシテ軍は、戦車や装備を備えた強力な軍隊を持っていていましたが、イスラエル軍は農民や羊飼いなどの寄せ集めの軍隊ですから、かないません。イスラエルの国は戦いに負けてしまいます。長老たちは集まって「**なぜ主は今日、我々がペリシテ軍によって打ち負かされるままにされたのか。主の契約の箱を…運んで来よう。そうすれば…敵の手から救って下さるだろう。**」（4：3）と話し合いました。「神の箱＝契約の箱」というのは、幕屋（神殿）の一番奥、至聖所といわれる場所に安置してあり、普通の人は見ることはできず、触れることもできず、運ぶ時は環に棒を通して祭司たちが担ぎました。神の箱の中には、十戒の石板、大祭司アロンの杖、マナの入った金の壺、の三種が入っていました。日本の祭りの時に担ぐお神輿と似ています。日本も天皇家の象徴である三種の神器があります。八咫鏡、草薙の剣、勾玉です。よく似ているので日本人はヘブライ人たちの影響を受けていると推理する人もいます。週報の表紙に「神の箱」の絵を載せておきました。神の箱はまさに、見えない神ご自身の象徴でした。

神の箱が陣営に到着すると、イスラエル軍が大歓声を上げたので地がどよめいたといいます。士気が上がったわけです。イスラエルの大歓声を聞き、神の箱が前線に来たということを知ったペリシテ軍は恐れ、こういいました。「**大変だ。このようなことはついぞなかったことだ。大変なことになった。あの強力な神の手から我々を救える者があろうか。あの神は…エジプトを撃った神だ。ペリシテ人よ、…あなたたちが彼らに仕えることになる。男らしく彼らと戦え。…**」（4：7〜9）ここを読むと、ペリシテ人の方が神の箱を恐れ、神の力を信じているのが分かります。そしてかえってペリシテ軍の士気が上がってしまい、その結果イスラエル軍は撃ち負かされて、みんな自分のテントに逃げ帰ってしまい、神の箱も奪われてしまいました。なぜ神の箱を持ってきたのに負けたのでしょう。神の箱に力がないからではなく、彼らに信仰がなかったからです。「**神は従う人々の群れにいます**」（詩編14：5）と書かれてあります。神に従わない者が、いくら「神の箱」を持ってきても、神は力を現わしては下さいません。イスラエルの人たちは普段は

神に聞き従わないのに、この時だけ神様を持ち出して勝とうとしたのです。神様はそのような願いは聞かれません。
先日、ＹＷＣＡ聖書を学ぶ会に始めて来られた方が、「神様の名前を使って戦争をすることは正しいのか？」と質問されました。十戒の第三の戒めに「**主の名をみだりに唱えてはならない**」とあります。みだりに唱えるというのは「神様の名前を簡単に持ち出して、利用する」ことです。自分たちの戦いは「聖戦（ジハード）」だという人がいますが、神の名を利用しているだけです。最後の審判の時、大勢の者が「主よ、私は御名によって預言し、御名によって悪霊を追い出し、御名によって奇跡を行いました」というが、キリストは「**あなたたちのことは全然知らない。不法を働く者ども、私から離れよ**」（マタイ７：23）といわれると書いてあります。彼らはキリストに聞かず、自分勝手にやったのです。

●南北戦争の時、戦局が北軍に有利に展開しだしたのを見て、ある人がリンカーン大統領に「我々はもう恐れる必要はありません。神様が我々の側にいらっしゃるからです」と言いました。リンカーンは「そうですね。でも今、我々にとって最も大切なことは、我々が神様の側にいるということです」と答えました。

さすがリンカーン大統領だと思います。神は我々と共にいようとされますが、我々が神様と共にいようとするかが大事なのです。

❷【偶像を打ち壊し、疫病を与えて民を撃った神の箱＝キリストの型】

神の箱は戦利品としてペリシテ軍に奪われ、アシュドドにあるダゴンの神殿に置かれました。「ダゴン」というのは上半身が人間、下半身が魚という半魚人のような神です。ペリシテ人が「海の人」だったからでしょう。ところが一夜明けると、主の箱の前にダゴンの像は倒れていました。そこで人々は像を元の場所に据えると、翌朝には再び像は主の箱の前に倒れ、しかも頭と両手は切断され敷居の所にあり、胴体だけ残されていました。更にアシュドドの人々にはれ物が生じたので、人々は「**イスラエルの神の箱を我々のうちにとどめて置いてはいけない。この神の手は我々と我々の神ダゴンの上に災難をもたらす**」（５：７）といって、その箱をガドに移すと、そこでもまたはれ物が流行ったのでエクロンに移されました。死んだ者も大勢いたようです。賠償の献げ物として「金の腫物の模型と、金のねずみの模型」を造って、神の箱と共に返したところを見ると、ペストのような感染症が流行したのかもしれません。神の箱は行く村々ではれ物を流行らせたので、人々は恐れて神の箱をイスラエルに返すことにしました。ここを読むとイエス様がゲラサ地方で悪霊にとりつかれた人を癒した時、二千匹の豚が犠牲になったのを見て、その地方の人が「**出て行ってもらいたい**」（マルコ５：17）と言ったことを思い出します。人々は乳を飲ませている雌牛二頭を用意し、神の箱を乗せた車を引かせて、行くままにさせました。母牛なので子牛の所に戻ろうとするはずなのに、右にも左にも反れずイスラエルに向かってまっすぐに進んでいったというのです。この災いが神の力によって起こされたことの証拠でした。こうして神の

箱は、戻ってきました。この「神の箱」はまことに自由です。イスラエル人もペリシテ人も何者も支配できません。イスラエル人であろうとペリシテ人であろうと罪のある所ではどこでも、誰にでも災いを降します。区別はありません。この「神の箱」の取り扱いには注意しなければなりません。軽々しく扱うなら身に滅びを招くでしょう。しかし信仰をもって迎えるならこれほど頼もしいものはありません。この箱はヨルダン川を二つに分け、エリコの城壁を破り、力を現わしました。

この「神の箱」は実は、キリスト自身を象徴しています。この教会には、至聖所の真ん中に「祭壇・宝座」があります。これは神の箱を継承したものなのです。十戒の石板の代わりに聖書、アロンの杖の代わりに祝福十字架、マナの代わりにキリストの聖体（聖パン）があります。それはキリストの言葉、キリストの祭司職の道具、キリストの体を象徴しています。つまり「祭壇・宝座」はキリスト自身なのです。この物語は、キリストの死と陰府下りと復活を予象しているのです。神の箱がペリシテ人に奪われて偶像の神殿に置かれたことは、キリストの命が敵によって奪われ、地獄に置かれたのと同じなのです。でも敵である死と悪はキリストをどうすることもできませんでした。「**死をつかさどる者、つまり悪魔をご自分の死によって滅ぼし**」（ヘブライ２：14）とあるように、むしろ、命の源であるキリストに触れたので死は麻痺し、死んだのです。この神の箱であるキリストは今日も、パンとぶどう酒の姿で、皆さんの中に安置され、皆さんの中の罪と死を焼き滅ぼし、私たちを聖なる神殿に造り変えてくれるのです。皆さんの内におられる方は大いなる神です。その方を信じましょう。

●イエス様が生まれた時、ヘロデもエルサレムの人々も「不安を感じた」といいます。榎本保郎牧師はこの個所についてこんなことを書いています。「イエスを迎えるということは、私たちの人生に一つの不安を呼び起こすことだと思う。…信仰とは、イエスを私の中に迎え、受け入れることであって、自分が僕になることである。舞台の主役を、自分からイエスに譲ることである。この二章に出てくる人たちはみなイエスに主役を譲っており、神の御心を優先させるようになったのである。だから不安が起こってきたのである。」

キリストが私たちの人生に入って来られ、あの方が主役になりました。私たちは僕になったのです。後ろに退かねばなりません。マリアやヨセフのように主役を譲りましょう。もはや生きるのも死ぬのも、あの方の為なのです。この世の命も、時間もあの方に奉仕する為にあるのです。この世の持ち物もあの方の為に用いてもらうためにあるのです。その時、神の箱であるキリストはあなたの中にしっかりと安置され、あなたは聖なる神殿となり、神の命と栄光と力があなたを覆うでしょう。神の箱であるキリストがあなたの味方となられたのです。恐れることなく、主に仕えてゆきましょう。